

硫黄島

俊寛の見た風景(日宋貿易)

平家物語には、硫黄島の住民が九州の商人に硫黄鉱石を売る風景が俊寛の目を通して描かれている。日本の中世後半以前の硫黄の交易状況を知る史料はこの俊寛の説話程度だったが、近年、その様子が詳しく解る遺物がみつかった。

A 2018年に福岡県博多区の冷泉(れいぜん)小学校跡地で、11世紀～12世紀半頃の日宋貿易に使われた港の石積が発見され、その周囲から硫黄島産とみられる硫黄塊が複数発見された。

硫黄島産の硫黄鉱石は、九州西側の航路で二日博多の港に集められ、そこで宋行きの船に乗って中国へ輸出されたと推定される。

石積から6m先に藻類の化石があるため、その辺りが波打ち際とわかった。おそらく硫黄塊は、その手前で積荷中にこぼれ落ちたようだ。そして、奇跡的に落ち葉などの有機質の堆積物に埋められることで分解されずに残った。硫黄はもろく、通常土の中では1週間ほどで硫黄酸化菌に分解される。**B**今回、福岡市埋蔵文化センターでその硫黄を見せてもらった。

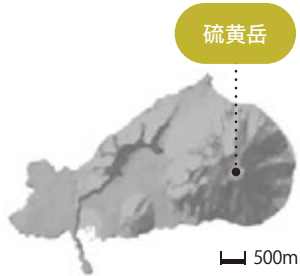
また、硫黄と共に生成される珪化岩の出土もことから、**C**噴気孔の形で運ばれたと推測される。

火薬は宋の時代に軍事利用がはじまったが、宋の支配域には原料となる自然硫黄が十分になかった。そのため海外に硫黄を求めて交易ルートが形成された。今回の発見で、硫黄島は約1000年も前に国際交易網の一端であったことが明らかになった。

思い出話

「硫黄が発掘されたので専門家に分析を依頼しましたが、古い硫黄が土中に残るはずがないと、はじめは信じてもらえませんでした。」

福岡県在住 60代男性



3